

2017年12月20日

## 2017年12月 (Nr. 441)

さて、今回は、ドイツ・ポツダム市にある Babelsberg (バーベルスベルク) 公園 (庭園) がテーマです。放送では、約 40 年という長期間に亘りこの公園の再建に力を尽くした造園家 Karl Eisbein (カール・アイスバイン) 氏がこの公園の中を歩きながらインタビューを受けています。

バーベルスベルク公園 (庭園) は、1833 年ドイツ皇帝ヴィルヘルム 1 世 (1797 年～1888 年) が宮殿の庭園を造るよう命じて、Peter Joseph Lenné (ペーター・ヨゼフ・レネー) 氏が取り組み、その後任の Fürst Pückler (ピュックラー侯爵) がその業務を引き継ぎました。ところがその後この公園は、その立地故に東西ドイツの分断の歴史の影響をもろに受けました。例えば、公園敷地内にはおよそ公園には似つかわしくない国境フェンス、立ち入り禁止地帯、見張り台、国境警備犬用の施設など国境につきもの諸施設が設置されると共に、遠方まで良く見通せるように木の枝も切られてしまいました・・・。

人がドイツの造園建築について話題にするとき、ピュックラー侯爵が Wörlitz (ヴェルリッツ), Branitz (ブラーニッツ) および Babelsberg (バーベルスベルク) で創作した造園家としての芸術作品をまず頭に浮かべます。その手本は英国の庭園でしたが、ピュックラー侯爵は英国よりもずっと多くの道を設置しました。そして、このようにしてずっと多くの Sichtbeziehungen (視界?) と Blickachsen (景観?) を生み出しました。

バーベルスベルク周辺のハーフェル川沿いに広い岸辺の道を既にレネー氏が設置しましたが、ピュックラー侯爵が設置した多くの小道は訪問者が殆ど気づかない内に次から次へと新しい美しい眺望へと、そしてその公園が実際より大きく、かつ神秘的に思わせるような視界へと誘っていきます。2, 3 歩行くと、そこでは遠くに小さな丘が現れ、さらに歩くと、その丘は既に手が届くほどの近さにあるような印象を与えますが、もう一歩進むとその丘はもはや見えなくなります。消えてしまったように見えます。

州都ポツダムの一市区であるバーベルスベルクでは、宮殿が建てられ、その宮殿の庭園が最初はレネー氏が設置する予定でしたが、9 年後にピュックラー侯爵に交替しました。レネー氏は、雨水が素早く染み込んだ結果、植物が余り良く生育せず、多くの植えた植物が枯れてしまうような砂を含んだ地面の対応に苦慮していました。ハーフェル川から蒸気機関を使って水を汲み出すことは費用がかかりましたが、他に手段がありませんでした。ピュックラー侯爵は大がかりな蒸気機関をネオゴシック風の城壁のように見える機械室に隠し

ていました。

その水を使って噴水、滝その他の仕掛噴水なども稼働させました。そして、バーベルスベルクには湖も造成されました。その湖は、水深 1 メートル足らずです。四つの小さなアーチ型の島には、穏やかに水が打ち寄せています。その内の一つにはリンゴの木が植えられています。そのリンゴの木は、デンマークの童話作家 Martin Andersen (マルティン・アンデルセン) の物語を想起させます。一羽の白鳥が森の静寂の中で湖の上を飛び、リンゴの木がある島に金の卵を落としたという物語です。その湖には 100 年の間全く水は存在しませんでした、今やハーフェル川から再び水が汲み入れられました。

この 120 ヘクタールの大きさの造園の芸術作品を復元・再建することに対しては 1972 年から 2008 年まで、途中 1989 年 7 月から 1990 年 8 月までの 1 年間の中断を挟みながらアイスバイン氏が心を砕きました。彼がそこでこの作業をスタートしたとき、自由に使えたのは、わずか 1 台のトラクター、1 組の馬車、1 台の電動ノコギリ、それに 7 名の同僚だけでした。西ベルリンとの国境のため、その土地は今日の公園の 3 分の 2 しかありませんでした。復元については何も考えられませんでした。とにかく、そこが荒れ放題になることは阻止しようとするだけで重要でした。

この公園はアイスバイン氏の熱烈な愛着の対象であり、人生です。この公園を復元・再建するために、アイスバイン氏は古い計画をじっくり参照しました。ベルリン王宮の保管庫に納められていたものは第二次世界大戦中に焼失してしまいましたが、バーベルスベルクの庭師木屋の屋根裏部屋で古い設計図を含むファイルが発見され、その古い設計図の中に 1880 年の設計図も存在しました。その上、アイスバイン氏は、手紙や日記も見つけ出し、これらを分析しました。

とあるバーベルスベルクの花屋が庭園修復技術者たちに贈呈した一冊の家族のアルバムの中でアイスバイン氏は一枚の写真を発見しました。それは 1935 年にバーベルスベルクの中で Victoriashöhe (戦勝記念塔) から Pflingstberg (フィングストベルク) 方向に向かって撮影されたものでした。この写真を見ると、木々が本来そうあるべき高さほどは高さがありませんでした。アイスバイン氏の推測したところでは、その二つの丘陵の間の視界を作り出すために、木々を最大限 8 メートルの高さまでしか成長させなかったのではないかということです。さらに、このハーフェル川越しのこの眺望は、ピュックラー侯爵により設置された壮大な景観の一つであろうと推察しています。

これを復元するために、アイスバイン氏らは 1975 年～76 年の冬にその 300 本のオークを伐採させました (現在なら伐採阻止運動が起き、オークが鎖でつなぐようなことになる

だろうとアイスバイン氏は想像します)。レネー氏もとピュックラー侯爵も、自分達がそこで造成したものは 150 年後になってようやく日の目を見るのだということ、従って自分の芸術作品を自分自身では決して体験できないことを知っていました。彼らが心に思い描いたものを、アイスバイン氏とその同僚達が復元しようとしています。しかしながら、そのような公園はとても長い時間がかかります・・・。

上記に、「レネー氏もとピュックラー侯爵も、自分達がそこで造成したものは 150 年後になってようやく日の目を見るのだということを知っていた」という箇所がありますが、ちょっとこの「150 年」というのは想像しにくいです。新たに植えた樹木が生育するのに 30 年～50 年にかかるだろうと想像されますが、150 年という長い期間というのは何を意味するかは良く分からない点でした。それでも例えば今新たな造園を行った場合、その「果実」は現在の世代ではなく将来の世代が享受するというのはやはりロマンを感じさせます。東京都北区に在住の私としては近くの庭園といえば、六義園があります。従来は桜咲く季節の六義園しか知りませんでした。今回の放送・課題を通して別の視点で六義園を見ることが出来るかもしれないと思っています。

また、アイスバイン氏らが約 40 年に亘る長期間、心血を注いで復元・再建したバーベルスベルク公園・庭園が今後も後継者らにより業務が引き継がれ、長く後世に伝えられることを願いたいと思います。

さて、Babelsberg (バーベルスベルク) という地名に関しては、私を含め一般のドイツ語学習者にとっては余り馴染みがないような気がします。実は私自身も NHK ドイツ語講座 (2017 年 11 月号) で、ユニバーサル映画株式会社 (ウーファー、Ufa) がこの地に 1917 年に設立され、広大な撮影所を開設したことを知るまでは Babelsberg (バーベルスベルク) という地名を聞いたことさえありませんでした。ナチス時代には、同社はプロパガンダ映画を制作するだけでなく娯楽映画も量産したようです。その意味ではドイツ映画の黄金期を支えた場所ということができると思います。現在は同社はベルテルスマン傘下であり、引き続きこの地に本拠を置いているとのこと。今後、Babelsberg (バーベルスベルク) という地名は、私の中では「公園と映画の街」として記憶されるだろうと思います。

K. K.

2018 年 1 月 21 日

## 2018 年 1 月 Nr. 442

女性にとっての女友達は、男性にとっての男友達よりずっと重要であるといいます。そして放送では何人かの女性が女友達に関する自らの経験談を語ります。

3 月 2 日の放送でファーストネームのみで登場する Gaby (ガービ) という 53 歳の女性は、自分の最初の女友達のことを未だに覚えています。ガービとその女友達はしばしば一緒に夜を過ごし、一緒に初めてタバコを吸い、トマトケチャップをつけてプレートヒェンを食べるのも好きだったそうです。ガービいわく、彼女達は、とても行儀が良かったといいます。ガービは、その後 IT 技術者アシスタントになりましたが、子どもの時、他の女の子とは異なり人形 (おにんぎょさん) が好きというわけではなく、他の女の子たちよりもむしろ男の子たちと一緒にいるのが好きだったといいます。女の子同志でいたずらっ子の徒党を組むなんてことは、当時はまだ考えもしなかったといいます。

大人の女性の間友情は、女の子同志の友情に比べより大きなストレスに晒されるといいます。女の子の時と異なり会話の時間が少ないといいます。そのため辛い経験に至ることもあるといいます。ガービは大人になってから大好きで馬が合う女友達がありました。ところがガービのボーイフレンドがその女友達のことを自分より気に入ってしまい、しかもガービはそのことをすぐには気が付かなかったといいます。ガービは、徐々に不信感を募らせるようになり、それが元でボーイフレンドとの関係が悪化しました。そのため二人は一時的に別れることを決めましたが、二人はその後まもなく最終的に分かれることになったといいます。すると、こうして別れてから 2, 3 日後、ガービのかつてのボーイフレンドは、人目を憚らずガービの女友達と会うようになったといいます。このことはガービにとって耐え難いほどつらいことでした。なぜならば、ガービは突然、親しい人を二人同時に失うことになったからです。

Dorothee (ドロテー) というファーストネームの女性は、子どもの時、最初の女友達と一緒に通りや庭を駆け回っていました。ドロテーが 4 歳の時、その女友達と一緒に隣家の庭に咲いていたヒマワリからその種をつまみ食いしたそうです。この女友達が後に転校して別の学校に行くようになった時、ドロテーはその女友達がいなくてとても寂しい思いをしたといいます。その後思春期では幼い頃とは異なり、女友達は大人達に対し、男の子達に対し、他の女の子達に対し、さらに場合によっては全世界に対してさえ団結するといえます。ドロテーにはそのような女友達がいまいませんでしたが、ギムナジウム上級段階に

進んでからようやく初めて Kathrin (カトリーン) という、親友と呼ぶのにふさわしい女の子と知り合いました。カトリーンは、ドロテーにとって天からの贈り物のようでした。ドロテーは、カトリーンなら思う存分に夢や空想について話すことができ、感傷的な厭世観や恋の悩みを克服でき、他の人をからかったり、他の人の悪口をいったりすることもできました。

カトリーンは、常にドロテーの人生についての助言者です。時折カトリーンは、ドロテーの全く意に沿わない何かを行うことをドロテーに殆ど強要してきたといいます。それにも拘わらず、ドロテーは、それを行って来ました。というのは、そうすることが自分にとっていいのではないかとどことなく予感したからです。そしてちょっと後になってから、ドロテーに行動を促したカトリーンはやはり正しかったということがドロテーには明らかになりました。

Ulla Lessmann (ウラ・レスマン) は、64 歳のジャーナリストであり、また作家です。既に推理小説 2 作品と多くの物語を書いています。これまでの生涯で実に多くの女性と友情を育んできました。ウラ・レスマンは、女性の友情には特性があると考えています。彼女いわく、女友達とは何かすばらしいものを嫉妬心なく喜ぶことができ、悩みがあれば、支援を受けられますし、お互い相談できます。彼女は女友達にしばしば助言を求めるといいますし、逆に女友達が彼女の助言を求めることもあるといいます。女友達は彼女にとってとても大きな意味を持っているといいます。従って、ウラ・レスマンは、自分にとってとても重要な女友達とは親密な関係を失わないように定期的に会うことに心を砕いているといいます。彼女にとってまた重要なのは、政治に関し考え方がある程度一致していることであるといえます。

レスマンは、Bremerhaven (ブレーマーハーフェン) の出身です。この街は北海沿いでブレーメン北部に位置する重要な港です。従って、第二次世界大戦中に多くの爆撃を受けました。1950 年代にはまだ依然として多くが破壊されたままになっていました。その瓦礫の中で遊ぶことは当然非常に危険であり、固く禁じられていましたが、それ故に子供達は瓦礫の中に行くのが特に好きでした。そこには自分の隠れ家を持っていました。しかしながらレスマンさんは、自分の家族が Köln (ケルン) に引っ越すことになった時、自分の当時の女友達を失ってしまいました。そしてケルンでは非常に孤独感を感じました。なぜならば、自分の北ドイツ風の話し方が新しい級友たちには馴染みがないように思われたからでした。レスマンには、2, 3 年後になってようやく、学校の合唱団と一緒に歌ったり、ダンスのレッスンに行ったりする女友達ができました・・・。

ところで、テキスト 20 ページに注釈 (Anmerkung) として記載されていた „Die

allerbeste Freundin" (Nr. 354) を参考までに聴いてみました。その中で印象に残ったのが親友（女友達）を持っているという妻についてその夫からの匿名の電話による不満の訴えです。その夫いわく、自分の妻が自分達のプライベートなこと、家庭内のお金に関する事などを女友達に何でも話してしまうということです。これでは夫としての立場がなくなり、自尊心も傷ついてしまうというものです。多くの男性はこの男性と同じ立場にいた場合、おそらく同様の感想を持つのではないかと思います。

さて、今回の放送・課題で Gaby という女性が登場します。「ガービ」というファーストネームとしては私は今まで Gabi の綴りで覚えてきましたので、「ガービ」に相当するドイツ語として今回 Gaby という表記もあることを知った次第です。因みに Gaby/Gabi は Gabriele の短縮形だそうですが、Wikipedia によるとドイツでは女性のファーストネームですが、イタリア語では何と男性のファーストネームとして使われるようです。また、Gabriele の男性バージョンは Gabriel であること、また大天使の一人 Gabriel（ガブリエル）が語源であると手元の辞書に記載があります。ところで、現在のドイツの外務大臣はこれが姓に使われている Sigmar Gabriel（ジグマール・ガブリエル）氏であることも思い出しました。ところで、日本でも男女共通に用いられるファーストネームがあります。例えば、「薫」です。従って「薫」という名前に遭遇した時は、男女いずれの場合もあり得ますのでちょっと注意を要します。既に知られている著名人の場合には問題ありませんが、一般人の場合には注意したほうが良さそうです。また、女性の場合には、「かおる」の他に「かおり」もあります。

また、今回の放送で Ich bin Jahrgang '52.（私は 1952 年生まれです）という表現が出てきます。私はこの日本語に相当するドイツ語としてはこれまで Ich bin/wurde 1952 geboren. という表現しか知りませんでしたので、こういう言い方もあることに新鮮な驚きを感じました。もっともこれらの二つの表現が全く同じ意味なのか、それともニュアンスの違いがあり使い分けるべきなのかどうかまでは分かりませんので、私としては今後も Ich bin/wurde 1952 geboren. を使うと思いますが、聞いたときに少なくとも理解できるように Ich bin Jahrgang 19xx. も覚えておきたいと思います。また、手元の辞書には Jahrgang を使った Er ist mein Jahrgang.（「彼は私と同年だ」）、Jahrgang 1980, Heft 5（「1980 年第 5 号」）、ein guter Jahrgang（「出来の良い年のワイン」）などの表現が掲載されており、それぞれが面白い表現であると思いました。

K. K.

2018年2月28日

## 2018年2月 Nr. 443

さて、今回は、ドイツでの隣人との関係がテーマです。

放送で登場するミュールンス（Mühlens）さんというドイツ人女性は、東南アジアに住んでいた時、2004年に大津波を経験しましたが、その大津波を生き延びたのは、ひとえに隣人たちに助けられたおかげです。翌年ドイツのハンブルクに戻りましたが、そこで彼女に明らかになったのは、自分がこの近隣間の相互扶助にいかにか大きく心を動かされていたかということでした。

ハンブルクは、多くの人が隣人を全く知らなかったり、全く知り合いになろうとも思ったりしない大都市です。ドイツの大都市のこの匿名性は、ミュールンスさんにとっては耐えがたいものだと思います。彼女は、自分が他の殆どの住民を知っていたり、人が互いに友好的に対応したり、不在時には誰が配送された小包を受け取ってくれるだろうかとか、休暇中の花への水やりは誰がやってくれるかしらなどと皆と一緒に考えるような住宅に住みたいと思っています。

ミュールンスさんは、隣人同士の良好な関係に比べ隣人間の争いごとについてずっと多く報道されていることは残念に思っています。彼女は2004年の自らの経験を思い起し、機能している隣人関係の好ましい作用を促進するために、より共同精神や協力を推進するための連邦レベルの市民運動を立ち上げていました。彼女によれば、人は今日、しばしばとても複雑な人間関係にさらされ、この複雑さにより多くの人は荷が重すぎると感じるといいます。この活動の利点の一つは隣人たちを見通せるとことだといっています。

ドイツでは50%もの人々が自分の直接の隣人さえ知らないばかりか、自分の隣人ともっと親密に付き合いたいと考えるのはわずか35%の人々だそうです。諸都市では引っ越し先で自分を紹介するために直接の隣人の所に行くのはすべての賃借人の3%しかいないといえます。このような状況に対応するため、ミュールンスさんは、路上を利用しての祭りを開催しています。既にその祭りの準備段階で人はお互いより知り合えますし、その祭りでは更に親しくなるといいます。しかしながら多くの人々はこれを望まず、距離置こうとするそうです。人は隣人に挨拶はしますし、彼らから助けを求められれば、彼らを助けもします。しかしながらそうでないときには、隣人と関わりを持たないですし、自らも隣人から邪魔されたくない、放っておかれないといっています。援助を受け入れることは多くの人にとって不愉快なことだといっています。

オルデンプルク (Oldenburg) の社会学の教授であるジーベル教授 (Professor Siebel) は、隣人に何かお願いをすることを自制してしまうのは、そのようなちょっとしたお願い事からでも債権・債務関係が生じるためであると言います。人は助けられればそのお返しをしなければならぬと考えているそうです。従って、お返しをする機会がなければ、ちょっとした贈り物により、その助けられたことに対しいわば「代金を支払う」ことで対応しようとすると言います。

以前は隣人間での相互の助け合いをするために、人が守らなければならない明確なルールが存在したと言います。例えば、突然雨が降り始めた時には、隣人が収穫するのを助けなければならぬと言います。しかしながら今日では、隣人との付き合いはもはや必要ではないということです。しかし人は隣人関係から逃れることはできません。隣人がどうしても不愉快に感じる人は、引っ越さなければならぬと言います。住まい探しをする人は従って、隣人に極めて注意を払いますし、自分と同類の人がいる住宅を捜そうと言います。隣人を余りに自分自身の近くに引き寄せることは時には危険を伴うことさえあるということです。

ウーリヒ夫妻 (Herr und Frau Uhlig) は、16 年前にツィーゲンドルフ (Ziegenderf) というハンブルクから 120km 東部にある村 (人口約 700 人) に引っ越しました。その 700 人と接触するために、ウーリヒ夫妻は村のあらゆる祭りに顔を出します。ウーリヒ夫人は、よい隣人関係を築こうと思う者は、特に引っ越しをして転入してきた者として、近隣関係をゆっくりと育てる必要があると言います。他の村民たちと一緒に 2016 年にある古い牧師館さえも再び改修し、そこに出会いの場を作り上げました。そこでは今や常に全く異なる人々が集い、そこには近隣の他の村からも多くの人々がやって来ると言います・・・。

ところで、上記に触れておりますように、ある調査によると、ドイツでは引っ越しをしてきた住宅の新しい借り主が隣人に対し挨拶を行うのは、都市部においてはわずか 3% しかないというのは、私にとって驚きを超えて衝撃的でさえあります。自らの経験では、日本においても、ドイツ勤務の際にも引っ越し先ではお隣さんへのあいさつは欠かさずずっと行ってきましたので、この事実には本当に驚きました。20 年前、30 年前のドイツでも同じような状況だったのでしょうか。それとも近年そのように変わってきたということなのでしょうか。また現在の日本では一般的には果たしてどのような状況なのでしょうか。因みに我が家は現在地 (東京都北区) の戸建て住宅に 30 年近く住んでおりますが、隣家が 3 年前に土地を売却し、その土地に某住宅メーカーが 4 軒の戸建て住宅を建てました。その 4 軒中、3 軒の方は我が家に引っ越しのご挨拶に来られました。この限られた経験を一般化はできないとは思いますが、戸建て住宅の場合には、集合住宅の場合とは異なり、引っ越し時の挨拶の習慣



はまだある程度残っているような気がします。

さて、今回の放送で Nachbar (隣人) の語源が der nahe Bauer (近くの農民) を意味する中高ドイツ語の Nahgebur に由来しているという説明がありましたが、近くに住んでいる農民同士が互いに助け合っていたということを考えますと、語源的に実に興味深いと思うと同時に、納得できました。今後 Nachbar という語に出会うたびに Nahgebur や der nahe Bauer を思い出さそうです。

また、今回課題冒頭で津波 (der Tsunami) という語の冠詞について取り上げられております。「津波」の冠詞は、波 (die Welle) からの連想ではなく、波が強風 (der Orkan) や台風 (der Taifun) により引き起こされるということからの類推で男性名詞の冠詞 (der) が付されているのだらうということです。たまたま、先日の NHK ドイツ語講座でドイツ語になったいくつかの日本語の語彙が紹介され、その冠詞についても一部解説がなされておりました。ドイツ語に入って来た時は、それに類似したものの冠詞が用いられるとのことでした。クラシックな例として「着物」(der Anzug からの連想で der Kimono)、「酒」(der Wein からの類推で der Sake)、「芸者」(女性なので die Geisha) などがあり、比較的新しい単語としては、「カラオケ」(das Karaoke、これには解説はありませんでしたが、Duden によると語義として leeres Orchester とありましたので、Orchester からの連想で das なのではないでしょうか)、「過労死」(der Karōshi、これにも解説はありませんでしたが、Wikipedia では Tod durch Überarbeiten と記載されていたので、「死」からの類推で der なのではないでしょうか) などがあるとのことです。変わりだねとして「薩摩」(die Satsuma) も紹介されていました。そしてその意味は、何と「蜜柑 (ミカン)」だそうです。薩摩藩から来たことからそのように呼ばれるようです。因みに Duden には、語義として meist kernlose, sehr saftige Mandarine と記載されていますので、Mandarine の一種ということから die Satsuma なのだと思いますが、私自身今まで全く聞いたこともありませんでしたし、講師の方の解説を聞くまでは意味の見当さえつきませんでした。die Satsuma という語彙が Duden に掲載されているとは言うものの、日本人のドイツ語学習者としては、一般のドイツ人の中では果たしてどれ位の人が理解できるか興味があるところです。

ところで、近所付き合いに関して思い出したことがあります。やはり NHK ドイツ語講座 2 月号の「過疎化」(Landflucht という私には耳慣れない語彙が使われていました) というテーマの中で日本では大都市圏への人口集中による地方の過疎化という問題があると同時に、一方では都市から地方へという逆の流れもあることについても触れられています。今回のテーマである隣人との関係にも関連しますが、健康的な暮らしが期待でき、近所付き合いも (nachbarschaftlicher Kontakt) 多いことが、特に子どものいる家庭にとつ

ては魅力的だからだといいます。都会の若者を引き寄せようと無料の宅地や安い家賃を提供する自治体もあるようです。地方から大都市への人口移動という大きな流れは変わらないとしても、放送・課題で登場するミューレンスさんやウーリヒ夫妻の場合のように、日本でもこれとは逆の動きも存在することも指摘しておきたいと思います。

K. K.

2018年3月20日

## 2018年2月 Nr. 444

さて、今回は、ますます減少傾向にあるドイツの農業従事者がテーマです。

ドイツの農業分野では人間の仕事をますます機械が行うようになってきています。しかしながら、機械は値段が高いため、広大な面積の耕地の場合でしか割に合いません。そのため農場の規模はますます大きくなり、その数は減ることになります。このような絶え間ない構造変化においては、毎年農場の約3%が生産活動から撤退し、20年～25年毎に農場経営体数は半減しているといえます。

そのような状況において田舎の雰囲気は良くないとのこと。経済的な問題を抱えている農民が多く、農業を諦める人も多いといえます。また精神的な問題を抱える人も多いようです。というのは、大抵の村では農民は少数派に過ぎないからです。組合の催しはしばしば午後5時にはスタートします。これでは家畜に餌をやるためにまだ畜舎にいる農民のことを殆ど配慮していないことになります。

街から田舎に移り住んだ新しい村民たちは、毎朝街に仕事に出かけます。従って日中どこかで火事が発生した場合、彼らは助けに来ることはできません。ある村では日中出動態勢にある農民が余りにも少数しか住んでいないところでは、ボランティア消防団は解散します。これに加え新しい村民たちは農業への理解が乏しいとのこと。その結果、自分達は侮辱されていますし、子供達も侮辱されていると感じる農夫が多いといえます。ある農夫は、射撃祭にはもう行かない理由として、そこでは3杯目のビールを飲んだあたりから決まって農民は環境破壊者であり動物虐待者であると批判する人がいるからだといえます。少数派の人間はつらいといえます。

農業分野でも競争で競り合うことは難しいようです。ある男性は、15年以内に雌牛の数を27頭から160頭に、また同時に羊の数は100頭から800頭に増やしました。しかしながら、これでも農業労働者を一人雇用できるにはまだ十分な稼ぎではないといえますし、彼の妻には重すぎる仕事とのこと。妻はしばしば病気になり、何時だったか、もうこれ以上できないと言いました。子供達は、何とか可能な限り親である夫妻を手助けしましたが、農場を受け継ごうとは決して思わなかったといえます。この夫妻は1年半の間今後どうすべきか考えた結果、農場を売却し、20キロ離れたある場所に移り住みました。この農夫は他農場の搾乳者の口の話ももらいましたが、今は社会福祉分野で全く新しいことに従事しています。他の農夫の搾乳者にはなりたくなかったからです。

大量生産は、広大な土地、大規模な畜舎および機械への高額投資がある場合にのみ行う価値があるといえます。しかしながら、ますます多くの負債を抱え込みたくはないけれど、農業経営を諦めたくない農民には、第三の可能性だけがあるといえます。つまり、より優れた品質に対しよりお金を払ってもらえるように農業経営を新しく方向付けするという方法だといえます。これならば、自分の土地を保有することなくできます。

有機農業を大学で学び、その後カナダの農場で働き、アルゴイ (Allgäu) でチーズ製造に携わった二人の若者は、牛舎および土地を借りることにより、農業法人を設立しました。二人は 70 頭の家畜を保有して、肉と牛乳を生産するとともに、卵を産む鶏も飼っています。2 頭毎の母親の牛に対し、その内の 1 頭は 2 頭の子牛に乳を飲ませ、残りの 1 頭は販売用の牛乳を産出するというように分業しています。雄の子牛はいつか畜殺される一方で、雌の子牛は成長して雌牛になります。絞った乳はそのまま生で飲むことができますので、その牛乳を買うために、ある年金生活者が隣村からさえもやって来るといいます。その牛乳は昔飲んだ牛乳と同じく美味しいからだということです。その年金生活者はこの牛乳に加え卵 10 個も買っていきます。

多くの消費者にとって環境保護や動物の健康はとても重要です。農業用の利用面積 1 ヘクタールに対し平均 400 ユーロの補助金を出す代わりに、連邦政府は EU からの補助金の一部を違うやり方で分配することができるので、特に動物に優しくしたり、または環境に配慮したりする経営を行う農業法人に対し援助することも可能になるだろうということです・・・。

さて、今回の放送および課題冒頭でドイツにおいて毎年農場の約 3% が生産活動から撤退し、20 年～25 年毎に農場経営体数が半減するという構造変化が起きているとの指摘がありますが、日本でも農業従事者数は減少しており、問題はドイツより更に深刻な問題と思われる。農林水産省の調査によりますと、2016 年 2 月 1 日現在の日本の農業就業人口は前年比 8.3% 減の 192 万人となったそうです。この数字は 1990 年に 480 万人だった農業就業人口の約 40% にまで落ち込んだこととなりますが、その原因は若者の就農が伸び悩み、農業の担い手の減少に歯止めがかからないためだと言われていています。具体的にどのような有効な対策を取るべきなのかは難しい課題だと思いますが、食料自給率や食料安全保障の観点からも農業従事者の育成を早急に考えていかなければならないと思います。

さて、今回の課題において「つらい」「苦勞をしている」という意味の *es schwer haben* が登場します。この表現で思い出したことがあります。かつてのドイツ・ゼミにおいて私のドイツ子会社勤務時代についてある参加者から „Hat Ihnen das Leben in

Deutschland besser gefallen als das Leben in Japan? ”と尋ねられました。私はその問いに対し „Das Leben in Deutschland hat mir gut gefallen, aber bei der Firma habe ich es in Deutschland schwerer gehabt, weil das eine Tochtergesellschaft der japanischen Firma war und da nicht viel geleistet wurde.“のような内容を自分なりに答えたところ、「つらい」「苦勞をしている」その他の表現も含め上記のように先生から訂正されました。この時 es schwer haben という表現が私の記憶に残りました。この es の使い方は自分自身も含め多くの日本人ドイツ語学習者には難しい文法事項の一つだと思います。これは論理的には説明がつきにくい成句的表現ということですので、そのまま覚えるしかない表現だろうと思います。因みに手元の辞書や参考書には以下の類似の例文が掲載されています。

Ich habe es gut.私はしあわせである/私は恵まれている。 Er hat es eilig.彼は急いでいる。 Er hat es weit gebracht.彼は成功した/彼は出世した。

また、先月の課題・放送で登場した Nachbar (「隣人」という語ですが、NHK ラジオのドイツ語講座 3 月号においてこの語の面白い合成語に出会いました。それは Sitznachbar という語です。これは Sitz (「座席」と Nachbar (「隣人」) の合成語で「電車などで隣に座っている人」という意味ですが、講座では前後の関係から単に「隣の人」と表現され、その「隣の人」が居眠りをしながら自分に寄りかかってくるのが嫌だという文脈の中で紹介されました。この言葉を聞いた時に意味はすぐ分かりましたが、逆に「電車などで隣に座っている人」をドイツ語に訳して下さいと言われた場合、私はこの語を知る前は Duden に記載された語義 jemand, der (in einem Saal o. Ä.)neben einem sitzt のように説明的に訳すことしか思いつかなかっただろうと思います。今後は一語で Sitznachbar と表現できますので、何か随分得した気分になりました。正に目から鱗が落ちた瞬間でした。また、この言葉は Duden での語義説明のように「Saal またはその他類似の場所」で使えるということは、電車やバスだけでなく「コンサート、映画館、教室その他の場において隣の座席に座る人」にも使える表現と思われるので、かなり応用範囲が広いのではないかと感じます。しかるべき時には是非使ってみたい表現の一つです。因みに今月は Nachbar+Dorf から成る Nachbardorf (「隣村」という合成語も登場しますが、私の経験ではあまりお目にかからない語句です。Nachbar の合成語の中で記事などにおいて比較的頻繁に目にするのは何と言っても Nachbarländer (「隣国」) でしょうか。

K. K.

2018年4月22日

## 2018年3月 Nr. 445

さて、今回は、職業を持った女性たちの家事、育児をめぐる葛藤がテーマです。

既婚女性は、その夫が同意する場合に限り、働きに出ることが許されるという法律が1977年になってようやく改正されました。言い換えれば、1977年7月1日になってやっと、妻は、夫が同意しない場合であっても、生活費を自分で稼ぐことができるようになったのです。他方では、夫は子供の育児においてはあまり発言権がありませんでした。これは妻の専権事項だったといえます。

女性の役割が大きく変わったのは20世紀後半においてです。2012年のあるアンケートにおいては21歳～34歳の年齢層の男性の75%、同じ年齢層の女性の90%が、家事だけでなく育児において男女平等に分かち合いたいと回答していました。ところが、これを実現することは難しいです。70年代には家族のための仕事（掃除、洗濯、食事の支度など）で果たす女性の割合は70%でしたが、現在でもその割合は64～67%とほぼ横ばいで変化がないようです。たとえ夫と妻の両方がフルタイムで就業している場合でも、女性がこれらの家事の半分以上をこなしています。

パートナー間における男女平等については実際はどのような状況にあるのかというレポートの中で、ツィーグラールさん (Frau Ziegler) は、自分がインタビューした女性に関しては放送の中ではプライバシー領域の保護のためにファーストネームしか使用していません。例えば、35歳のザンドラ (Sandra) さん。彼女は疾病保険会社の医療関係事務部門において事務職員として働いていました。そこでは2年の期限付契約でしたが、その契約が満了した時、その職場では以後はもう必要ではない旨言われました。それからわずか1週間後に自分が妊娠していることを知りました。彼女がそのことをタイミング良く気づいていたとしたら、その契約は更新されるはずでした。

さて、彼女は失業してしまい、再び勤め口を見つけるのには大いに苦労しました。ところが、彼女は運が良かったといえます。彼女は多くの応募の内の一つをあるスーパーマーケットチェーン宛てにも送付してみたところ、実際にその会社から面接試験へ来るようにとの連絡がありました。彼女が夫と一緒に住んでいる地区にあるそのスーパーマケ

ットの複数店舗の地区責任者が彼女を月 80 時間労働という条件で採用したからです。実際にはしかしこの時間単位の雇用形態が彼女にはとても気に入り、その結果そこで月に 160～200 時間働きました。

しかしながら、現在は彼女は働きに行く必要がありません。なぜならば自分の 7 人目の子供が生まれた後の「育児のための親の就業免除期間（育児休業）」（Elternzeit）を取っているからであり、そしてその期間の賃金支払い停止の一部に対し国から育児手当を支給されているからです。しかし彼女の 80 時間契約は今も尚生きています。会社はしかしながら、彼女に対し解雇を通告する機会もほとんどありませんでした。というのは、妊娠期間中および産後 3 ヶ月以内は解雇からの保護が存在しているからです。彼女は常に再三に亘ってすぐに妊娠していたからです。

彼女の夫もまた、1 年間は子供の面倒をみたかったし、この期間は「男性主婦」、いわば「主夫」のような役割もやってみたかったところでした。ただ、そうした場合、彼女は「育児休業」（Elternzeit）を打ち切らなければなりません。だがそうすることに対しては会社が同意していませんでした。というのは、会社は、彼女が育児休業後によりやくまた業務に就くという前提で予め調整していたからでした。

というわけで育児休業中には彼女はもっぱら一人で家事と育児を担いました。そうすると彼女は、夫が主婦および母親としての働きぶりについてほとんどありがたさが分かっていないという印象を持っています。夫が仕事から帰り、開口一番、「コーヒー買うの忘れたの？」との言葉。すると、彼女はこれに怒り、一日中考えてしまいます。「夫がいなかった間のほうが自分にとってはずっとよかったわ！」夫にとって特に大事なものは、子供達が立派に育てられていること、住まいがきちんとかたづいているように見えること、いつも何か食べる物が用意してあること、それにこれらのことは夫にとっては彼の妻、すなわち自分より重要であるということなどを彼女は時折考えてしまうといえます。

ハイケ（Heike）さんは 3 歳になる双子を持つ 40 歳の母親です。夫のスヴェン（Sven）さんが主夫として家事を担当しています。彼が父親になったのは、既に 46 歳の時でした。ハイケさんはフルタイムの税理士として働き、相当お金も稼いでいるということです。一方、スヴェンさんはジャーナリストとして 16 年間の勤務の後、広報担当官となりました。その職場では彼は妻ほどお金を稼いでおらず、その上、パートタイマー契約を決断しました。ハイケさんはスヴェンさんに毎日料理をすることを約束していましたが、実行できてはいません・・・。

ルイーゼ（Luise）さんは、1 歳と 3 歳の男の子を持つ 31 歳の母親です。パートタイ

ムの歯科医（週 3 日 21 時間）を務めています。16 歳の時両親の離婚を経験していることから、健全な家庭を築くことに心を砕いています。週末は夫にも育児の一端を担ってもらっていますが、何か事が起きると、「ママ！」と呼ばれます。二人目の子供が産まれた後、また外で働くようになったとき、ぜひとまでは思いながら週 3 日お手伝いさんに来てもらっています……。

冒頭にありますように、ドイツでは 1977 年の法改正により既婚女性は、その夫が同意する場合に限り外で働くことができるようになったということでしたが、私が調べたところでは、実は 1958 年までは更に夫の権利が強く、妻が働いて得た給料の管理は夫が行うようになっていたようです。また 1962 年までは妻は夫の同意なしには自分の銀行口座さえ開設できなかつたといえますから改めて驚かされます（これらの点に限っては日本の方がまだ女性の権利は認められていたようです）。ドイツでは 1960 年代末の学生運動を経て、70 年代に始まった女性の解放をめぐる議論が繰り広げられたという社会状況が女性の社会的地位の向上に果たした役割は大きかったものと思われま

さて、外で働く母親が育児や家事で苦勞しているのは日本でも同様だろうと思います。これに加え日本ではそうした働く母親にとっての大きな問題として待機児童（「子育て中の保護者が保育所または学童保育施設に入所申請をしているにもかかわらず、入所できない状態にある児童」Wikipedia より）があります。自治体によっては「待機児童ゼロ」を達成しているところもあるようですが、そのような自治体は圧倒的な少数派だと思われま

本年 3 月、連邦統計庁の発表によると、ドイツの最新年（2016 年）の出生率が 1.59 を記録したとのニュースが伝えられました。この数字は 5 年連続の上昇とのことでしたが、それでも欧州諸国全体の平均 1.6 を僅かに下回ったようです。ドイツでの出生率の上昇は外国人女性の高い出生率（2.28）の影響もあるようですが、ドイツ人女性に限定しても 1.46 とのことですので、日本の数字（1.44）を上回っています。今回の放送・課題に登場する 7 人の子供がいるザンドラさんの場合、子供の数では例外中の例外だと思われま

ところで、日本でも少子化が問題になっています。日本では女性の社会進出に伴い晩婚化が進み、出産年齢が上昇した結果、体力的な問題が生じたことや、子育てに伴う経済的な問題などが出生率の低下を招いたと言われていま



(Frauen- und Männerrollen im heutigen Japan) というテーマが取り上げられた際に、日本の出生率低下は「草食男子」(Gras essende Männer) という恋愛に消極的な男性の増加が一因ではないかというゲストからの指摘があり、これにはなるほどと思いました。今回の放送・課題を聞きますと、やはりドイツの出生率が低いことの一因として女性の社会進出もあるようですが、上記統計などを見ますと、最近は移民政策の影響もあり日本とは若干状況が異なり、少子高齢化のスピードが日本よりはやや遅くなっているかもしれません。日本においても出生率改善のための対策が望まれるところです。

K. K.